

民族と土地

社会主義テーゼ三〇

(1)

G・ランダウアー
松尾 和彦 訳

1 意志の諸傾向は、他のすべての諸概念と同じく、抽象的に定義されるべきではなく、歴史的な諸条件から多少なりとも明確に限定されるべき社会主義という言葉で総括され、社会状況、および、生活財と文化財の獲得、生産、分配の、ある一定のいつそう詳細に記述されるべき変革を企図する。

2 すべての変革の志向が——意欲するものがそれをどれだけ深く自覚しているかにかかわらず——目ざさねばならないのは、第一に、認識を根拠とするか、生活状態と両者によって促進された、もしくは阻止された本能的な生活を根拠とするか、それとも起源が多様な文化理想を根拠とするかして未来に不可欠なものと感じられるものであり、第二に、過去を根拠として、人間の外的かつ内的な諸状態のなかに存在している可能性である。

3 多様性、微妙な言いまわし、矛盾についてのこの簡略な、凝集された言葉のなかに、どれほどのものが潜在しているか考えられるのは、一般化し、広範化し、同様に個別化し、拡散する志向ならび

に社会主義が一樣ではありえずして、さまざまに分岐し、散開し、分化しているにちがいないということを理解し、むろんのこと認めるにちがいない。

4 社会主義が照準をあてるのは、今日の社会組織のなかに確実に存在し、いたるところで実現される可能性、すなわち、経済的に有用な労働にもかかわらず貧困であり、いぜんとしてそうであり、もしくはそうなるはずの人間がおり、経済的に無用な労働または完全な失業にもかかわらず富裕であり、いぜんとしてそうであり、もしくはそうなるはずの人間がいる可能性であり、さらには労働への意欲があるにもかかわらず労働が許されない人間がいる可能性と現実である。かくして社会主義は誰もが自分の労働によって自分と自分の後見する子供、老人、さもなくば病人、身よりのないものに普通の生活だけではなく、快適な生活だけでもなく、すぐれて文化的な生活をも提供することができる状態を創造することを欲するのである。

5 社会主義をヨリ明確な、ヨリ確固とした、ヨリ確実な言葉で明言しようとする一切の試みは、社会主義の本質ではなく社会主義のある一定の傾向が明言されるのである、ということに帰着する。以下においてはこうしたことが、見解と意志のきわめて明白なる一傾向、まさに私のそれを表現するこれらの文章の意図が判然としているが故に、生ずるはずである。

6 もう一度くり返そう。社会主義者はある一定の共同社会 *Genossenschaft* のなかで有用に労働する人間すべては（労働することができない、もしくは特殊な理由で労働を免除されている、この共同社会の所屬者とともに）文化生活へ完全に参加する可能性を有する、ということ欲する。

7 この目標に到達する処策と手段を探索する以前に、有用な労働ということ、共同社会ということ、文化ということ、何が理解されるべきか、一言されねばならない。

8 共同社会の人間の生活維持と文化のために不可欠である物財を獲得し、加工によって製造し、輸送し、もしくは分配する労働は有用もしくは生産的と呼ばれる。ごくわずかの力の費消で今指摘したばかりの労働を組織化する労働も有用である。生産労働のための補助手段をつくるか障害を除去する一切の労働は有用である。精神と肉体を鍛練し、治癒するすべての労働は有用である。生活物財の獲得、加工、輸送、分配を容易にするか改良するかを旨とする研究者の労働は有用である。労働獲得物か労働諸形態に美を与えることは有用である。労働する人間に喜びを与え、昂揚、深遠な感覚をもたらすことは有用である。

9 けれども、最後に指摘したもの、研究者、芸術家、詩人はす

でに限界上にある。彼らの行為と彼らの精神の特異な才能は生産労働の領域から自己を排除しようとする。科学は英知になる。芸術は他の生業ではなく、人類の最も奥深い必要と衝動に奉仕する職業そのものとなる。詩作は戦闘、狩猟、農耕とブドー栽培、他のすべての労働から自己を解放する。それは芸術になる。

10 生活そのものではなく、何が生活に役立つかを指摘することだけが有用である。食事、活動と停止、睡眠または用便、子供をつくることや産むことが有用な労働であると誰もけつして言ったことはないのである。労働は現状、人口稠密と文化風土においては第一の、もしくは自然の秩序の生命活動のために必要である第二の、人為的な秩序の生命活動である。さて英知、芸術および詩作は同様にその名辞を宗教と呼びたい第三の秩序の生命活動である。宗教は新しい自然となる人為性であって、これはもはや生活に奉仕するのではなく、私たちの自然の生来的な行為、感情、衝動と同様に生活そのものであり、宗教はそれらからその素材をとりだす。宗教がその素材を生活、生活の平安な美しさ、生活の激情からではなく、第二の秩序の領域、生活のための諸方策、有用性と労働の分野からとりだしているとするなら、その徴証となるのは労働が阻害され、組織されていないこと、自然の生活にのみ存在しつづける争闘、粗暴、苦悶が、それらの所屬してはいない領域、すなわち、生活に奉仕するはずである労働の分野に浸透しているということ、これである。

11 思想家、詩人、芸術家は有用性に奉仕するのではなく、ぜい沢もしくは宗教に奉仕する。何が得策であるか、社会主義的な共同社会においてはできるかぎり少数しか存在しないこうした昂揚し

人間が生産労働に専心したり、宗教もしくはぜい沢のために多くの長い祭典時間を期待したりすることが良いかどうか、あるいはかつて僧侶に關して生じたように、共同社会が彼らを扶養し、養育するであろうかどうか、という問題は今日では解答できない。おそらく、彼らはむろん若いころには労働の共同社会に所属し、長ずるまでうむを言わず教え込まれているのだから、せいぜい精神や隠遁または祝祭にしか生きられない、ということもまたそうである。

12 こうした特殊なものがどうして生ずるのか、を今日語ることは重要ではない。なぜなら、この際には大学教授、ジャーナリスト、アマチュア詩人、名著の著者の主張ではなく、おそらく常に、社会主義的な労働組織の時代においても、それらが否認されることが認められるであろう少数者の主張が確実であるからである。ついには彼らは苦惱し、思いわずらうかもしれない。ぜい沢を創造するものは、その生活がぜい沢にできているが故に、苦悶をこうむることににおいてもはなはだしいであるにちがいない。

13 風土にふさわしい食物、保健、衣服と住居、十分な余暇、それらを可能ならしめるために、 $\wedge$ 民族 $\vee$ または共同社会の諸勢力が入手しうるすべての技術の応用および余暇を快適にすくすくするために、理性と衝動、肉体と精神の多様なぜい沢のための手段は $\wedge$ 民族 $\vee$ ないしは共同社会の文化に属する。確固としてないものもかくのごとく一般的にはそれ以上言うことができない。風土、歴史的に生成された欲求段階、技術、ぜい沢の風習は相互に制約し、限界を相互に規定する。

14 だが、 $\wedge$ 民族 $\vee$ ないし共同社会とは何かを語りだそうとしている現在、今までまだ何とか可能であったようには、通俗的な表現

と整合的にふるまうことははやできないのである。今まで私たちはごく一般的な所見によって多くの特殊性を包括することに成功している。だが、 $\wedge$ 民族 $\vee$ とは存在しないものである。そして、ここでせいぜい言えることは、 $\wedge$ 民族 $\vee$ とは他の同じような共属感 *Zusammengehörigkeitsgefühl* と対立している多くの人間の一つの共属感であるが、かかる感覚の性質と基盤はいかなる場合にも、共通の根源、共通の類概念をもっていないだけでなく、相互に類似さえしていないそれら独特の歴史的な諸制約をもっている、ということである。

15 すなわち、今日考えられているように、 $\wedge$ 民族 $\vee$ とは国籍、国境、経済的または文化的な単一性から成る混合物である。国家と国境はいわゆる歴史の最も下劣な現象形態の貧しい偶然の所産である。国籍、人種、種族の諸特性は驚くほど深い根をもち、結合している個体の諸本性である。フランス国民とは一つの言語結合体であり、それ故に一つの精神会盟であり、一つの宗教共同社会である。ラブレール、モリエール、ヴォルテールはその君主であり王である。ドイツ国民も同様である。 $\wedge$ 民族 $\vee$ の歌はこうした光榮ある同盟のマグナカルタであり、ゲートはその点で王である。だからユダヤ人はその統一、そのイエサイアスとイエス、スピノザをもっているのである。かつて他の精神結合体があったが、これは言語の精神に支配されておらず、ましてや言語のように国境の前で停止はしなかった。その精神結合体とはモスクワからシベリア、スペインにまで達する自分のダンテ、ゴティツク式をもつキリスト教団のことである。その起源はすべての精神の起源と同様であって、少数者の頭脳、臍、心臓からであり、 $\wedge$ 民族 $\vee$ のおぼろげに感じられる苦悶と欲求

からであった。しかし、その真髄は、それが非のうちどころなくその絶頂に立ったときに、存在していた。すなわち、表明、御しりと変容、文化共同社会の芸術、これである。ゴティツク式の塔や尖塔、不均斉なもの均斉、美しく強力な結びつきのなかの自由、自分の組合や教会をもっているキリスト教団は最も高度の、最も力強い意義における $\wedge$ 民族 $\vee$ 、つまり精神同盟の経済・文化共同社会への最も緻密なる浸透であった。

16 しかし、こうしたことは過去のことである。そして、私たちの文化の上に精神の旗をかかげ、幻想の嵐を吹かせる神の制圧者がいつやってくるのか、私たちは知らない。重要なことは適応することであり、明確に見ることである。偉大な統一は解体されている。無数の小さな精神共同社会が現にあり、存在を欲しているが、何らの文化総体とも必然的には結合していない。にもかかわらず、紡ぐことや織ること、鍛練することや組み立てることがかつてはある精神に充たされていた、と考えられている。いかなる精神もいかなる幻想も製造や農耕、商業や交易とは関係ない。化学者、技術者、いわずや法律家は、彼らが組織者であるかぎりにおいて（おお、神よ!!）、有用な人間としてそれとは関係ない。だが、ダーウイン主義または目的論、意志の自由、唯物論と唯心論をめぐる闘争はある全く別の領域である。この精神は精神そのもの以外に肉体をもっていない。

17 フリードリヒ・ニーチェは、精神にこうした肉体、生命とのこうした関係、こうした有用性を与える一考に値する、そしてすべての力の美しい緊張がそのように呼ばれるべきであるとするならば、力強い試みを行なったのである。私が彼を正しく理解している

とするなら、彼の激情的な思考ならびにきわめて繊細な情緒の誘因は次のような欲求であった。つまり、精神の最も並はずれたファンタジーや構造、魂の最も深い墮落を人間の生き生きとした諸関係にまで混合的に上下に移行させ、道徳的欲求や力からすべての精神を説明し、欲求もしくは権勢の充実へ、かくしていかなる場合にも人間の共同生活へ、エトスとエトノスへすべての宗教と精神の織りなすものとを還元させる欲求である。だが、ことはそんなに単純ではない。キリスト教団は中世の $\wedge$ 民族 $\vee$ の精神であったが、それは、教団がその生活と共同生活の表現であるからではなく、俗世の、物質的かつ精神的な人間を連結する意義をもっているからでもなく、それとは反対に、教団が人間の生活と共同生活に超越的な意義、超自然的な意義を与えるからであり、労働したり、攻撃しあったりする人間のすべての目的を廃棄し、変容と救済という一つの目的に高めたからである。しかし、世界のこうした本質が現に生きている人間の精神を放棄することはない。生活のかかる目的は私たちの精神のなかへ入り込まない。だからこそ最後には、精神が十分に暗黒になっておらず、頭脳があまりに明澄であるニーチェの試みはもはや強力とではなく暴力的と呼ばれるべきである。彼の偉大な熱望はついには彼をしてわずかの助力で満足させるようにした。彼は閉ざされた城門の前に立っていることに耐えられなかった。しかし私たちはそれに耐えねばならない。城門は閉ざされている。

18 しかし、国民と呼ばれる言語結合体は全く同様である。国籍は美しい、愛すべき真理である。経済生活とその結合は一つの虚構である。ドイツ語が存在し、それとの関係においてドイツの風俗、ドイツの文化、ドイツの詩がある。だが、ドイツ語が存在しな

いと、ドイツの石炭やドイツの鉄、ドイツの縫いもの機械やドイツの化学薬品もない。人間はなお生産地の性格を保持している特定の産物、ニュールンベルクの菓子、ヴェストファーレンのハム等々とともに現われるのではない。きわめて痛ましく不幸なことに、郷里の産物を列挙しようとする、人間はもはや多くのものを見出しえないのである。労働が郷里、共同体、州、県と再び結合する時代がやってくるであろう。しかし言語とは結合しない。郷里と言語はなるほど少しばかり関連してはいるが、相互に決定的な関連はない。郷里とは大地、風土、州、県、とりわけ地理上の諸条件と人間の結合である。郷里は肉体であるが、言語は精神である。郷里と言語は風俗と慣習によって、それ故にきわめて密接に結合されている。しかし、言語には羽があり、郷里と郷土をはるかに越えて翻る。これに反し、郷里も大地も見捨てた労働は国民もしくは言語の共同社会の道を歩まないし、パン切りナイフでバイオリンを演奏できないように、その道を歩むことができないのである。この分裂した事態という思考のなかの混乱はきわめて無意味なので、素気なく大ざっぱに語られねばならない。言語は方言、言語使用、なまりにおいて州、県と離れられぬ関係にある。言語がそれ以上に成長するのは書物、学校、教会の言語によってであり、思想家や教育者の散文、偉大な詩人の詩によってである。だから、国民が存在するのである。今や、労働は全く他の諸条件に従って、地方の生産地や都市の同業組合を見捨て、もっと大きな交易市場を見いだした。こうした状態が生ずるという原因は、もっぱら、こうした全く分裂した事態が相互にいくらかかわりあうとするならば、二つの現象が国家に結びつけられ、包囲されているということである。国家は郷里の慣習、

風俗、言語の慣用がより偉大な芸術や包括的な言語精神に成長するのを阻止することはできない。しかし、国家は、大きな経済、芸術の共同社会の発展を、それらが生産の過程、技術、交換に呼応するように、変更し、阻害したりし、それらが欲するであろうところでは、抑制したり、絶滅したりしたのである。

19 かくして、社会主義は精神の諸問題とは全く関係なく、きわめて多端であるので、社会主義の障害となる精神的な諸傾向を克服せねばならないが故に、国籍というまやかしの所見が今一度社会主義の障害となるのであれば、社会主義は言語結合体とはどんなつながりももたないが故に、社会主義にとってはただ文化が、すべてがそれに関連している可能性が問題であるが故に、言われるべきことはその内部に社会主義が存在しうる「民族」、つまり、社会主義的諸制度をもつ「民族」はいかなる種類の国家でも国民でもないということである。それどころか、「民族」とは数百年來存在しておらず、なにはともあれ再び創造されねばならないものである。「民族」は経済共同社会である。「民族」は文化会盟である。私たちは統一し、呪縛するいかなる精神をもってはいない。私たちはなにごととくその精神をもってはいないのだ。私たちは単一の精神、言語精神、団体精神をもっているが、「民族」の神は死亡した。だから、経済的に言う、唯物論者の「民族」は重要である。文化、余暇、精神のために、経済共同社会、文化「民族」が国家のかわりとならねばならない。かくして、私たちが語る「民族」は国籍や国籍と全く関係ない。それは、事実上は存在するが会盟や同盟でもないより高度の組織体でもない、人間のあいだの結合である。そして、何と言っても、すべてのかかるより高度の組織体は、たと

えなお制限された程度であるにせよ、やはり精神であり迷妄であるが故に、私たちはこう言うのだ。社会主義が孤立しアトム化された人間の精神と願望のなか以外の他のところに存在しうる以前に、まずもってこの新しい「民族」精神、この新しい「民族」がそこに存在せねばならない。と。社会主義は第二の、より高度の秩序という構造、すなわち新たに生成する「民族」の組織体のなかでのみ存在し得、実際に存在し得、現実として存在し得るのである。社会主義の組織化は今日では皮相に考えられるものとは全く異なる何かである。生産と流通の諸過程をもとにして、人間は集合し、ある構成物、ある共属組織、無数の器官と分節をもつ組織体へと合生せねばならない。社会主義は国家の内ではなく外部で、国家の外で、この腐朽した愚行、この組織化された干渉、この巨大な無頼漢、がなお存在するかぎり、さしあたっては国家とならんで現実となろう。

(つづく)

Gustav Landauer, *Volks und Land, Dreißig sozialistische Thesen in Beginn. Aufsätze über Sozialismus*, Köln, 1924.

麦社解散の公示

麦社は一九七三年五月二十七日付をもって解散いたしました。おくれげながら右報告いたします。

一九七四年四月三十日

麦 社

向井孝『山鹿泰治 人とその生涯』

山鹿泰治が亡くなってからかれこれ四年になる。上品でいて頑固、ワンマン革命家（個人行動を組織活動に優先させるという意味だ）でいて献身的、徹底した唯物論者、合理主義者でいて、ロマンチスト、といった得難い個性の持主であった。彼自身は「山鹿泰治個人宣言」（一九六五年三月記）で、「エスペラント、世界市民、戦争抵抗者、アナルコテクノクラシーは、私の宝ものである」と述べている（二二一ページ）。

この山鹿に生前もつとも近い位置にいたのが向井孝である。彼もまたエスペランティストで世界市民で戦争抵抗者（WRI）である。彼が山鹿の死後、その遺品を整理して山鹿文庫を沼津にこしらえたのは決して偶然ではない。そしてまた、彼が山鹿の生涯を語る本書をまとめたのも、必然の成行きであった。彼でなくたってがこの仕事をやれたらうか！

山鹿は病を得てから、『たそがれ日記』と題する九一篇にのぼる回想を書き残した。本書はこの『たそがれ日記』からの抜き書きを柱にしなげら、向井がそれを補筆していくという手法を取っている。いふなれば、山鹿と向井との共同制作である。本書は読み手によっていろいろに読まれることができる。

山鹿泰治という類い稀な人格との触れ合いをそこに求めることも可能だし、戦前、戦後にわたるアナキズム運動、エスペラント運動、WRI運動の貴重な側面史としても興味深々たるものがある。見返しを使った山鹿の自伝風スケッチも楽しい。

（六百円 青鯊房―東京都板橋区赤塚二―三五一九 白樺ハウス（号）

「大杉栄の旅」小感 (2)

秋 山 清

大杉栄の跡をたずねて葉山から鎌倉に回ったのは去年の八月二十四日であった。

鎌倉の小町のにぎやかな通り、駅前の広場（バス・ターミナル）からすぐのところにトンカツのうまいのを食わせる店がある。あいにくその名を忘れたが、その店のゆかりの人（といってももう八十歳近いおばあさんのはず）は小町にいた頃の大杉家に出入していた人、ときいていた（長芝義司氏談）ので、立寄ってそのことを尋ねると、ちょうどレジに坐っていた人がその主で、長芝さんから聞いていた女の人の弟だとか、その人から「最近の『鎌倉タイムス』によく調べて大杉や村木（源次郎）のことが出ていますヨ」ときかされた。

あいにくそこにはそれが揃っておらず、鎌倉タイムス社の電話をしらべて、すぐかけて見たが留守番の者で要領を得なかった。私とその『鎌倉タイムス』を見たいと思ったのは、五十年もつと以前に、その土地にいた大杉栄たちが、今その土地の小新聞にどんな風に書かれているか、それが知りたかったからである。私の小さな

「大杉の旅」が地理的なものから歴史的にかかわろうとしているのだ、というささやかな実感でもあったのである。その旬刊の『鎌倉タイムス』を見るためには、と考えて市役所の広報課を訪ねることにした。鎌倉市役所は駅を挟んで向う側（南側）の、あたらしい建物だということだった。そこにいてようやくその新聞を見ることができた。

それは「鎌倉の社会主義者たち」という見出しのつづきもので、その88から90まで「村木源次郎」が語られ、91が「大杉『相州鎌倉』へ」となり、以下三回に亘って大杉栄のことであった。鎌倉と大杉の関係がまず次のように略記されていた。

「大杉が大正九年四月末、鎌倉瀬戸小路の大谷嘉兵衛の貸家に移った当時の騒ぎについては前に書いたが、この移住後、最初におきた大事件は、夏期平民大学であろう。しかし、それに続く十月の上海密行は、日本社会運動史上画期的な事件であろう。さらに、この年十二月に結成された日本社会主義同盟の発会式に前後して、鎌倉の大杉邸に集まった社会主義者たちによってひきおこ

された騒ぎは、鎌倉における社会主義者の集団的な運動としては、おそらく明治・大正・昭和の戦前期までを通じて、あとにも先にも、例のない事件であった。大正期社会主義運動の最先端にあった大杉は、かれがしばしば転居を余儀なくされていたこととわかるように、安心して居住したり移転できる自由はなかった。大杉には居住の自由も、移転の自由も許されてなかった。」

大杉の鎌倉における状態とその、日本の社会主義運動とのかかわりの大要はこの記事に尽きているといってもよからう。私が鎌倉市役所の広報課にいったとき、一足ちがいでこの新聞の発行者豊原正緒とは逢えなかったが、その人が「鎌倉の社会主義者たち」の筆者であることも後日には解かった。それはそのとき逢えなかった豊原正緒（馬上亮吉）が大杉や村木の記事の掲載された『鎌倉タイムス』を寄贈してくれたからである。

大杉栄が鎌倉小町の瀬戸小路に移ったのは大正九年四月、その一ヶ月前の三月に彼は、前年五月の調査殴打事件で入獄していた豊多摩監獄から出獄している。『大杉栄研究』（大沢正道）や、日本の名著の『大杉栄』（多田道太郎編集）などの年譜を辿ってみると、前年にひきつづいて大杉にとってこの大正九年は、活動的な年であったが、その多忙な時期に、東京から少しはなれた鎌倉にいて、活動のあい間に心身を安めつつあったという趣きもある。

3月、豊多摩監獄から出獄する。4月、鎌倉小町瀬戸小路へ移る。6月、『労働運動』を廃刊する。8月、日本社会主義同盟の発起人になる。10月、極東社会主義者会議に出席のため、上海に密航する。12月、日本社会主義同盟主催の講演会場に姿を現す。この頃、東京毎日新聞の「記者」になる。また肺結核が再発

する。『大杉栄研究』年譜

以上のように大杉自身の活動としても、日本の社会主義運動としても、括目すべきであったこの年を、大杉は鎌倉の小町に住居をおいていたのである。この時日本のアナキズム運動は、大杉栄とともに冒険的なある試みを敢えてしている。それはわが社会主義運動における最後の共同戦線のことである。いや、最後の、といってしまえばすこしの誤解を挟むことになるが、それには二つのものがある。大正九年の社会主義同盟とその翌年の『労働運動』（第二次の刊行）における共同戦線のことと、大杉はそのどちらにも関係し、その期間彼の住居は、この鎌倉小町だったのである。鎌倉小町における大杉は、静養をかねた移転であつたはずだったので、到底それの許されぬ情勢が彼を包んでしまったようである。

大杉は「新獄中記」（大正九年八月執筆、望月桂との共著『漫文漫画』に採録）に、

「三月の末に出獄して、四月の初めにちよつと十日余りお上にだけ行衛不明になって関西地方を歩き回り、帰るとすぐ静養かたがたここに（注・鎌倉）引越してきて以来は、毎日毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝ばかりの、なまけ放題である。

お蔭でいい加減、監獄で瘦せたからだだが、日ましに太って行く。」

とか、また、

「目方も三貫近く増えて、十六貫になんなんとしている。

こんなことは生れて初めてだ。よく医者には、せめて半年ほど何もせずに遊んで暮さないか、病気がすっかり治るのはうけあうから、と口ぐせのように云ったものだが、わずか二月か三月でこん

などとは思ひもよらなかった。」

と書いている。鎌倉小町は彼に一時の休養を与えたらしい。このしばらくの時期の大杉のことを『鎌倉タイムス』はこんな風にかいている。

「大杉はもっぱら鎌倉の新居にあつて、静養しながら著述と翻訳に専念した。入獄前に近藤憲二たちと創刊した『労働運動』（一次）もこの年六月で廃刊している。」

「時代は大杉のジャナリズム活動に幸じていた。葉山事件いらい一時、大杉をボイコットしていたジャナリズムも、急速な時代の推移で大杉を必要としていた。大杉はカムバックにあつて、大杉攻撃にまわった新聞雑誌にむかつて、威勢のいいタンカをきっている——

『その新聞屋、その雑誌屋がだ。図々しいにもほどがある。世態人情が少々変わり、物騒な無政府主義が流行りものになったとなると、急にびよんびよん頭をさげて、

どうぞ、先生……
でなことでやって来る。』

——やがて時ならずして、世界革命の激しい波が大杉を巻き込み、鎌倉の閑居での著述生活を打ち切らせるのだが、さしあたって、大杉は鎌倉での静養著述生活をまず確立することであつた。

大杉は書いている——

『刺しゅう屋さんと差配との幾折衝の後、僕らはやはりそこに落着くことになった。そして僕は横浜での大道徳家、教育何とか会の会長、実業家中の大人望家、嘉兵衛爺さんの不品行を助長すべく、明白にその店子となることができた』——『鎌倉から』——

一次『労働運動』（六号）

大杉とその家族が、長芝三之助（村木源次郎の叔父に当る）の世話で借りた家の家主は谷という女名前の人だったが、それは当時横浜の豪商で製茶王などともいわれた大谷嘉兵衛の囲われ者で、大杉の表現を借りると、

「この家は嘉兵衛さんの内緒の家なんだそう。女名前の谷という、嘉兵衛さんの内々の何かの、食扶知にあてがった家なんだそう。うだ。したがって、この家のことがわかれば、ひいてはそのごく内々のことまで自然にバレようという訳だ。」（同上）

ということの次第であつた。大杉家がそこに引越した翌朝の新聞にそのことが報道され、その嘉兵衛さんが横浜から飛んで来て、差配、長芝三之助（むろん村木も加わって）との折衝があつて後、前記大杉の書いたように「僕らはやはりそこに落ちつくことになった」という次第だったのである。

さて、ここで次の記事を思い返してみたい。これは『講談日本社会運動史』の第四章「日本社会主義同盟及平民大学」の冒頭の部分である。

「日本社会主義同盟を胚胎した山崎今朝弥の平民大学は大正六年五月七日に創立された。その夜は又そこで売文社を中心とした在京主義者のメーデー記念会が催され秘密裡に日本社会主義者の名義で露国社会党へ宛て、露国革命の成功を祝福し将来の希望を表明する決議文を可決して送ったが、平民大学の有名になったのは山川均を教頭、岩佐作太郎を理事長として月刊雑誌『社会主義研究』を創刊した大正八年五月からであつた。」

「大正九年の六月頃労働問題研究会の橋浦時雄、吉川守邦、服部

浜次、平民大学の岩佐作太郎、山崎今朝弥等は社会主義者の大同団結日本社会主義同盟を計画し、九月其れから実質上成立するまでには凡そ二十回の会合が平民大学で開かれた。近藤憲二は常任として平民大学に泊り込んで山崎と共に事務を執った。平民大学ではこの間巡回大学、見学講演、無期講習会等を開催して同盟会員を募った。大学での講演は何時も階上真に立錫の地なしで、外には交通整理巡查数名、包囲の警官数百名という盛況であつた。」

この記述は、平民大学と次に出来た社会主義同盟とのかわりを語つて余りあるもの、つづいて次のような記述を見るのである。

「労働運動者と社会主義者もしくは社会主義的知識階級との接近は日を追うて甚だしくなった。更に加うるにすでに述べたように社会主義が思想界、読書界の一躍寵児となり、社会主義者の人気も頗る宣しい時であつたので、当然、何か社会主義的の一大団結を見ねばならなかつたのである。その機運がいよいよ熟して、その具体的に現れたものが大正九年十二月九日の『日本社会主義同盟』であつた。」

「社会主義同盟は初め、橋浦、服部、吉川、山崎、岩佐等によつて所謂従来の巨頭連を除外して計画を進められ、彼等が如何に従来の感情衝突をなすとも最早大丈夫という程に団体が大きくなつた時に、初めて彼等を発起人に加えたのであつた。所謂巨頭連を除外して計画をなし成るべく広く、新しく、あらゆる社会主義的分子を抱容し、永い間四分五裂のままに放任されていた諸勢力を打つて一丸とし、従来の如く所謂巨頭小多数の感情衝突のために運動を阻止しないようにしようという主旨であつた。そこで従来

の社会主義者はいうまでもなく、新しく台頭して来た労働団体（友愛会、信友会、正進会、交通労働組合、日本時計工組合、鍼灸総連合、労働同盟会、学生団体（建設者同盟、扶信会等）、思想団体（新人会、曉民会、労働組合研究会、著作家組合、文化学会等）及び学者、思想家、文士、新聞記者、弁護士に至るまで八方にわたりを着けたので、十数回会合後の発起人には各方面の代表者をあまねく網羅することが出来た。」（同上）

私は、大杉が鎌倉の小町にいて、社会主義同盟というこの連合戦線の成立を、あまり賛成でもないといった顔つきで、しかし必ずしも全く傍観的ともいえない態度で見守つていた時期のことをあれこれと想像する。

「永い間四分五裂のまま放任されていた社会主義の諸勢力を打つて一丸とし」という思いつきは、この時の社会主義思想の高まりを目の前にして、しかもその全体の力はまだまだ弱かつた、という現実においては、誰もがそう考えたがるところである。この時期に於ては、アナキズム系の大杉たちと堺、山川らとの対立があり、また堺らと国家社会主義の高島らとの対立も強まっていた。「永い間の四分五裂」というからには、明治四十年（一九〇七）の第二回社会党大会における直接行動論を挾んでの幸徳と片山・田添の議会政策派の対立、その後の田添、片山らと西川光二郎らの対立、あるいはその以前から『新紀元』によるキリスト教的社会主義派の存在などのこともある。それを一応、対立から協力の態勢に組みかえようとの念願が、勢心な活動家たちの一部に生ずるという情勢も、あるいは時の必然だったかもしれない。もう一度それを見て、その帰趨を見定めるくらいの必要はあつたであらう。社会主義同盟の推進

力の中には岩佐と近藤憲二がその中枢部にいて、大杉にもその実体の把握に不足はなかったであろう。その同盟結成が進みつつある間に、大杉は鎌倉小町の家から暮夜ひそかに抜け出でて、上海の極東社会主義者会議に出席したのである。ロシア革命の成功をバックにしたコミンテルンの東洋への政策として開催された極東社会主義者会議で、コミンテルンの方針とは相容れぬことを承知しながら、何故に大杉はそこに出席したのであるか。それは大杉の強烈な現実感覚による行動であったと私はかんがえる。現実感覚といっても、変革のきっかけを掴みたい、それが掴めるかもしれない、という期待があったはずである。むろんそれは、かもしれないという期待であるが、ロシアに革命が成功した、ヨーロッパに大戦があつて、これが終り、その戦後の動揺はまだおさまってはいない。日本にも労働運動が勢力をつよめ、社会主義思想はかつてないほどのひろがりをもちつつある。具体的な変革の手がかりを掴みたい、掴めるかもしれない、この「かもしれない」へのひそかな、僅かな期待、それが国外に大杉を誘ったのである。国内の社会主義同盟の進展にほとんどわずかにしか期待しないにもかかわらず、彼はそれにも反対の態度を、信頼の少さにもかかわらず、表面化せずに、上海の極東社会主義者会議に、単身出かけるという冒険を敢えてしたのである。その時のことは彼の死後逸早く刊行された『日本脱出記』に彼自身が書いている。

私は昨年十月一日の朝日新聞の「思想史を歩く大杉栄とアナキズム」で、彼の上海行のことに触れて書いたが、そのとき大きなミスを一つしてしまった。

「非妥協の精神」一途に來た大杉だが、しかし彼には必ずしも共同

戦線を蔑視しなかった顕著な二度の試みと実践がある。大正九年秋の社会主義同盟には発起人として加わり、また上海の極東社会主義者会議に出席し、帰国してアナ・ボル共同戦線を実践した。

第二次『労働運動』の時期である。」

ここまではこれでいい。社会主義同盟と第二次『労働運動』とは、ともに大杉栄が関係した二度の大きな運動上の共同戦線にちがいない。前者は周囲の人々の意向で消極的ながら参加したらしい、という形であつたが、後者は、内心危ぶみながらであつたらうと推察できることながら、進んで敢えてしたことであつた。彼自身はその後これを失敗と見たことは確かかなうだが、進んで試みて、失敗を実験し納得した上で、対ボルシェヴィキとの対立に入つたことは、この上ない経験といわねばなるまい。これら二度の共同戦線を、アナキズム運動が、社会主義運動との根底からの思想的、また活動方法までの相違を確認したことにおいて、貴重な足がかりとするこの出来たのは、大きい意味において失敗ではない。それは経験なのである。

さて、私は極東社会主義者会議へ鎌倉から出かけて行つたことを記したにつづけて、以下のように、そのとき書いてしまった。

「コミンテルンの上海の極東社会主義者会議には、大正九年十月行つて十一月に帰国した。その時も、大正十一年十二月世界アナキスト会議にフランスへ潜行したときも、彼は鎌倉市小町の瀬戸小路の家から行つた。」

これはとんだ間違いである。傍点したそこが見事に間がらつているのである。

冷静に考えてみるまでもなく、フランスへ渡航したときは、東京

の本郷駒込片町の労働運動社に居住していて、そこから出発したのであることは、いく通りかのその年譜に明記してあるところ、それをついとうっかりしてしまつたことは、何とも申しわけなきミスである。(読者の多い日刊紙上で犯した過ちであつた。近く朝日新聞社から刊行される『思想史を歩く』(下)には、そこをとりあえず訂正したが)。

さて、上海に出发するその日の夕刻、新聞印刷工組合正進会のストライキ敗北についての記事を、出発前のあわただしい時に、頼まれて書いて渡していったということが、近藤憲二の回想として書かれている。そのこともまた鎌倉小町の家出来事である。私もこの話を、戦後になって、その原稿を依頼に行つた桑原練太郎その人から確かに聞いたと思つてゐる。日ははっきり覚えなないが、日本アナキスト連盟の創立総会の少し前、その準備のために毎日午後の五時頃から、茅場町停留所の近くにあつたゴム・ビルの四階の狭い私の事務所に先輩たちも集まつて来ていたある日、そのことを聞いた。それは近藤憲二の「一無政府主義者の回想」の中の「大杉栄のこと」に書いてあることと殆んど一つであつた。

密出国して上海へ出かけるなど知るはずもない桑原が吃りながら咄々と語る争議の経過をこまごまと聞いて、出発間きわの一時間ほどをさいて、大杉はその報告書をかいてやつた。「この報告書は正進会の機関誌『正進』の当時に載つてゐる。引き出して読んでみる」といい。名文だ。戦いに敗れた戦士が、悲痛な面もちで、しかも明日の復讐を心に誓いながら、ひるまず、堂々と敵陣へ降つていくさまが、ものの見事に描き出されている」と近藤憲二はそこに書いているほどだが、その報告書はむろん『大杉栄全集』(現代思潮社版)

にも採録されている。だがここに一つの異論がある。

「桑原練太郎は新聞印刷工の正進会の会員ではなく信友会のメンバーである。その桑原が正進会の機関誌の記事を頼みにいく筈がないではないか」という、まことにものともない異論である。また、「あれは大杉がかいたのではない」という説を立てる人だつて在るかもしれないが、まったく「そうですネ」ということしかないことである。ではなぜ、近藤憲二は、正進会、信友会の桑原練太郎、報告記事、それらの関係を知らぬはずもない人が、少しの疑問もなく、桑原練太郎が依頼に行つたこと、その原稿をあわただしい時間に大杉がかいたことまで、はっきり大杉の回想記のなかで書いたのであるうか。桑原自身もまた同じことを後輩のわれわれにそんな話を語りかけたのであろうか。

『日本脱出記』の中で大杉もまたR(桑原)がその日の夕刻にやつて来て、鎌倉から大船まで、どこに何をしに行くのかともきかず、大杉の荷物を運んでくれたということを書いてゐる。

私は鎌倉小町の大杉の住居のあたりに行つて見たとき、はからずも前に書いたようなミスを犯したが、さらに、『正進』の記事のことで、意外な疑問に出あつてゐるのである。今はクリーニング屋になつてゐるその家のあたりに立つて、これらの思いが、書きちがいを、ふと誰かがやつたとしても、五十年以上も昔のことだ、ありそうなことだと慰める心になつた。『正進』の記事の間違を、ミステリ風に思いめぐらすのであれば、わけもないことながら、そのことも一度は書いておきたいと思つていたのである。(つづく)